

令和7年4月  
一橋大学

令和7年度一橋大学一般選抜（前期日程）第2次試験

出題の意図等 【国語】

## 問題一

現代文の読解力を試す問題である。近代日本における学校教育や軍隊教育のなかで自己の内面を赤裸々に綴ることを目的として導入された日記であるが、点検者や自己という読者を想定しないわけにはいかず、自己演出の書記空間となった。毎日記すという習慣ともあいまって、書き手がさまざまな規範を、あたかも自己のものとして内面化し、それを本心と思いこむ構造ができあがる。いったん規範を外れようとする、他者から、暴力的にその逸脱を矯正しようとする力も働いた。それでも、そうした構造をふまえたうえで、そこから逸脱して自己の内面を赤裸々に描くという選択をする場合もあった、ということを描いた文章である。

問い一 内容を理解した上で語彙を的確に選択し、かつ漢字を正確に書く能力をみる。解答例は、A「秘匿」、B「誇張」、C「順応」、D「検閲」、E「罵倒」

問い二 日記は内面を正直に書くものだとしてされているが、日記の点検者ばかりではなく、将来の自分自身も読者とすれば、その読者を想定して、見せたい理想の自分を演出するのが日記であるという著者の主張を把握できているかを問う問題。

問い三 日記を記すことで規範が内面化する構造を理解したうえで簡潔に記せるかを問う問題。

問い四 逡巡しつつも、書くことの欲望に身を委ねた事例が挙げられていることの意味を問う問題。他者の眼差しやさまざまな規範に縛られざるをえない自己演出の空間である日記の制約や規範を認識したうえで、そこから逸脱して赤裸々に内面を記していることに著者が注目している点が理解できているかを問う。

## 問題二

いわゆる近代文語文は、近代の日本社会に深く関係しており、当時の知識人が新しい課題にどのように取り組んだかを知る上で重要である。そうした文章の読解力を試す問題である。文章では、権利（人権）が権力者の実行によって初めて生ずるとする加藤弘之の主張に対する反論が行われており、それは実行される以前から本来的に存在することが主張されている。

問い一 語句や文法に加え、指示語の内容が理解できているかを問う。解答例は「压制者のせいで自由自治平等均一の権利という天賦の権利を実行することができな

ったのである」などである。

問い二 文章の内容を理解できているかを問う。「有無」が「隠顕」と対比的な概念であることに留意しつつ、規定の字数で適切にまとめる。

問い三 文章の内容を理解できているかを問う。ここでの「傾倒」は文字通り「傾き倒れる」という意味であり、筆者は加藤弘之の思想が誤りであることを主張している。こういった点に留意しつつ、規定の字数で適切にまとめる。

### 問題三

文章全体の論理を正確に読み取る読解力と、それを二〇〇字で要約する文章表現力とを問うことを意図している。素材となる文章は、現在において求められるメディアリテラシーについて述べたものである。真偽を簡単に見分けられないあいまいな情報をやり過ぎ、不用意に発信しない力としての「ネガティブ・リテラシー」の必要性が主張される。この文章の内容を二〇〇字の解答制限のなかで要約するには、ただ単に論点を列挙するだけでは不十分であり、それらを元の文章の論理構造に沿って再構成したうえで、新たな文章として表現する必要がある。